

この1年を振り返り、「人の国際移動」についてあらためて考える

著者	戸田山 祐
雑誌名	コミュニケーション文化学会会報
巻	17
ページ	1-1
発行年	2021-03-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00007027/



コミュニケーション文化学会会報

Department of Communication and Culture Society Newsletter, Otsuma Women's University.

第17号 2021. 3. 19

大妻女子大学コミュニケーション文化学会発行

〒102-8357 東京都千代田区三番町12 大妻女子大学文学部 コミュニケーション文化学科

この1年を振り返り、「人の国際移動」についてあらためて考える

コミュニケーション文化学科 専任講師 戸田山 祐

私の専門はアメリカ合衆国とメキシコの歴史です。とくに、両国のあいだを移動する移民の歴史を研究しています。また、日本を含めた世界各国・各地での、「移民」や「外国人労働者」と呼ばれる人々の現状にも関心があります。国境を越える人の移動の「自由」と「不自由」に注目して、近現代の世界のあり方を考えるというのが、私の研究の大きなテーマとなります。

さて、私が大妻に着任してから1年が経とうとしています。着任直後に緊急事態宣言が発令され、研究室にも自由に行けず、荷物の搬入もできない日々がしばらく続きました。そして、この原稿を書いている2021年1月末の時点で、2度目の緊急事態宣言を迎えています。当然ながら、人の移動の「自由」と「不自由」をめぐる問題について、つねに考えさせられる1年でした。

まず、歴史研究そのものが、移動の「自由」によって可能となっているということを思い知らされました。すくなくとも、私が専門とする近現代史研究の場合、必要な史料の全部が編集・出版されていたり、オンラインですべて入手できるなどということはまずありません。夏休みや春休みには、史料を探して、各地の文書館や図書館を訪れて回ります。もちろん、外国の歴史を研究する場合、しばしば訪問先は海外になります。国外への移動がほぼ不可能となり、国内であっても他の地域への移動がはばかられ、自分が所属していない施設や機関の利用が制限されている状況のもとでは、研究活動そのものが大きく制限されることになります。

また、私の専門分野である「人の国際移動」について大学で教えることの意義をめぐっても、再考を迫られました。学生に移民研究とは何かを説くにあたり、いままでは「今日、国境を越えた人の移動はますます活発になっています」「みなさんも将来、留学や就職で外国に長期滞在する機会を持つかもしれません」といった、移動の「自由」を前提とした説明をすることが多かったのですが、現状ではこれは説得力を失ってしまいました（現下のパンデミック以前にも、誰もが「自由」に国境を越えられたわけではないことを考慮すれば、これはそもそも安易で不適切な説明なのですが）。

人の移動の管理・統制の実態を明らかにし、その背景にある権力関係について批判的に分析することこそ、移民研究の本質的な目的なのかもしれません。現在、大学教育の場でこのテーマを扱うにあたって、そうした視座はたしかに必要なものでしょう。しかし、それだけではどうも面白くないように思います。国境を越える人々の主体性に焦点を当てたうえで、できるだけ彼ら・彼女らの具体的な経験や声を伝えることができないか、と考えつつ、試行錯誤の毎日です。